

男と男の相談



見聞が広くなる——なんてオツカア殿は言うけど、そんなチャンスは大人になつたらいくらでもある。僕が欲しいのは何時替わるか心配せんと、のびのびと過ごせる所が欲しい。

長坂 隆雄

中学生の一番面白い時に転校なんてあんまり残酷だよ。

転勤を聞いた夜は頭がフラフラになり目の前がボーとしてたぞ。

僕はまだクラブの連中に転校の事は話してない。

クラブの連中にちょっと聞いてみた事をここにあげると——

サラリーマンに転勤は避けて通れないものではあるが、学期中途である十月の名古屋より東京への転校は中学二年の息子にとって、さすがに腹に据えかねたようである。

家族は一緒に生活するのが当然と考え、転勤の都度、転校は当然と思っていたが、今回はついに息子は切れた。

転勤の内示があつた数日後、机上

「これは男と男の相談です」と書かれていた。続いて、

「田舎に育つたオヤジ殿は中学、高校時代、転校なんぞなかつたでしょう！」

僕『おいH、オマエのオヤジはサラリーマンか』

H『オレ、イエス』

僕『そんなら、何時転校するかわからぬな、転勤で』

H『ノー、そんな事はない、だつて

サ、オレのオヤジの行つてゐる会社

は全部名古屋だもんね』

僕『いいな、オイーTは』

T『タワケ、俺の家は家で商売して

筆者紹介



長坂 隆雄（ながさか
たかお）七十三歳。
無職。

現住所 千葉県船橋
市。

受賞の言葉「突然の受賞のご連絡を受け、
恐縮しております。親子の関係は複雑なもの
で、特に父親と男の子の関係は実に微妙
なもので。母親との会話はあっても、父

親との会話は余り無く、あつてもなかなか
発展しないのが実情でしよう。

その結果、子供の心をいちばん分かつて
いないのが父親であったように思います。
経済成長期にあり、転勤は当然で、それによ
ともなう転校も当然と考へていた私に、子
供から受けた母親抜きの相談は、改めて子
供の成長を知り、その将来を考える機会で
した。

子供から受けた自發的な相談に対する親
の対応は、子供の将来に有形無形の大きな
影響を与える事でしょう」

んだぞ、あるわけないがヤ』

僕『なにー、畜生、オイー、Kは』

K『オレンチのトーサンは会社員だ
けどHと同じで支店が全部名古屋だ』

つぎの四問目が問題、嘘じやない
よ。

僕『オイ、Fヨー、お前は』

F『ウーン、おれの家はいつ転校す
るかわからん』

僕『なにー、オレと一緒だ』

F『だけど、おれの家のオヤジは物
分かりいいから、オレ一人隣に下宿
させてやるって約束してくれたモ
ン』

僕『ゲソーーいいな』

F『お前、まさか転校を考えている
んじやないだろうな』

僕『(ギクレー) そんな事かんがえる

筈がないがヤ』

という訳であります。

今僕が抜けたら八人でバレーをや
ることになるし、僕のポジションは
攻撃の要であるセッターという難し
い大事なポジション。

県大会を目前に控えて、今僕が抜
けたらセッターは一体誰がやるんだ
い。

仲間のみんなに何といつたら良い
んだい。

絶対に東京へなんぞ行きたくない。
この社宅は次に入る人がいるから居
れないんでしょ。それならどこかの
空地にテントでも張つて生活しても
いい。

今まで通り、新聞配達で資金稼ぎ
をして生活してもいい。

もう子供扱いはせんといて。

料金だつて大人分とられるんやから。

だろう。となると、否応なく転校するようになるよ。

これはオヤジとムスコの男対男のサシの勝負だから、オツカア殿が入ると余計ヤヤこしくなる。

オヤジ殿冷静に僕の気持ちを考えてくれ

転校をしなくて済む方法はお前の言うように空き地にテントを張つて、一人残る以外に方法はないかもしねないな。

それで良いと言うのなら、お父さんは止めないよ。今晚から前の広場で生活してみるか

この手紙を前に私は一瞬噴き出した。

併し、度重なる転勤が、子供の心に大きな負担を与えて来た事を改めて知つて驚かされた。

私は早速長男と話合いをもつた。

「そんなに転校が厭いやだったら、転勤を断つてもいいんだよ。でも、会社が了解してくれなかつたら、会社をやめる事になるだろう。

ここは社宅だから、追い出される

でなく、全身を搔きながら逃げ帰つてきた。

彼はその後、しばらく沈黙の時が流れた。

数日後、新聞配達所の主人から突然に連絡があつた。息子から販売店に下宿して新聞配達を続けさせてほしいと申し入れがあるが、親として了解しているのかとの問い合わせであつた。

熟慮の末、息子の得た最善の解決策なのかもしれなかつた。

夜になると、懐中電灯と塵じご、毛布

を小脇にいそいそと家をでた。

可哀想なような、可笑しいような

複雑な思いで妻と様子をうかがつていたが、案の定と言ふべきか、夜の十一時を過ぎた頃、テントの中は虫

や蚊が飛び交つて、到底眠れる状態

中学一回の転校を重ねていた。

転勤による転校は当然と思い、その結果への配慮を余り深く考えなかつた自分の愚かさを改めて反省させられた。

周囲をみれば、一度も転勤の経験をした事のない人も少なくない。

私は単身赴任を考えた。

併し、思春期の男の子にとって、父親不在の影響がどのような結果になるか心配だった。

紙上では荒れる思春期の子供の二

ユースを耳にする事も多い。

考えてみれば、転勤を「唯々諾々と受けた自分に問題があるのではないか」と思った。

私は思い切って、事情説明の上、

転勤の再検討を会社に依頼した。最悪の場合、退社もやむをえないと思悟の上であつた。

意外にも、私の意向を受け、会社は私の転勤を取り消してくれた。

内 容：父母のこと、私の信仰、子へ伝えた
いこと、心に残る体験、生活の知恵、
おやさと紀行、天理教への夢、社会
への提言、その他、『陽気』誌につ
いてのご意見、ご感想など。

備 考：数枚まで（四百字詰め原稿用紙）
考：原稿末尾に住所・氏名（匿名可）
備 考：年齢・職業・電話番号を明記。
備 考：ファックスでも受けます。

送り先：〒632-0016 奈良県天理市私書箱十五号
掲載に際しては、ページの都合上、一部編集させていただきます。掲載に関する問い合わせ、二重投稿はお断りいたします。原稿は返却いたしません。掲載の方には薄謝を進呈。

養徳社「陽気」編集部

FAX ○七四三一六三一八〇七七
〔読者のひろば〕係

読者のひろば

(終)

併し、人事内定が既定化されてい
る以上、私の居場所はなく、子会社
への出向を了承せざるをえなかつた。
以後、私は会社を去るまで、転勤
には縁なき生活をおくる事ができた
が、親会社へ戻る事はなかつた。

息子は今、みちのく仙台の大学で
研究者の傍ら、バレーボール監督として
後進の指導に情熱をかたむけてい
る。

が、親会社へ戻る事はなかつた。

以上、私の居場所はなく、子会社
への出向を了承せざるをえなかつた。
以後、私は会社を去るまで、転勤
には縁なき生活をおくる事ができた
が、親会社へ戻る事はなかつた。

深夜の見回り



高田外亀雄

るんだ」と言つて、何回も「〇〇〇」と読み方を暗唱した。さらに、「うちの子は習つたことはしつかり覚える。親としてうれしいよ」と子供をほめた。すると、親の期待に応えようと頑張った気がする。結果として、父は育て上手だったのだ。

明治三十六年に生まれた父は、旧国鉄の線路工夫で仕事人生を終えた。父は幼児期の明治四十一年に石川県能登から北海道に移住したという。

私が小学五年のとき、国語の教科書を毎日声を出して読むのが宿題になつた。音読である。読んでいると、父がのぞきこんで「うんうん」と相槌を打ち出した。やがて「むにやむにや」という感じの妙な声を出した。（父もいっしょに読んでいる）と感じた。ときには「この漢字なんて読むんだった?」ときいた。知らせる

秋も深まつたある日の深夜、家族が寝静まつたときリリンリリンと玄関の電話が鳴つた。当時（昭和二十年代）一般家庭に電話は普及していなかつたが、我が家には鉄道関係者だけに通じる鉄道電話があつた。

独学で身につけたのであろうか、簡単な四則計算や読み書きはできた。正規の教育を受けなかつた人にあり

と「そだつたな。父さんすぐ忘れてた。

「わかりました。すぐ見にいきます」

低い声が家中に響いた。

父は寝巻をぬいで着替えた。出かけるつもりらしい。

「保線区長さんからの電話でしょう。出か

なんて言つたの?」

最終列車の運転士が「線路の状態が悪い」と連絡し、それを上司が伝えてきたらしい。

「保線区長さん、すぐ見てこいと言つたの?」

筆者紹介



高田外亀雄（たかだ
ときお）六十五歳。

現住所 北海道亀田
郡。
無職。

受賞の言葉「親と子の関係は、人それぞれだと思います。私の父は、「学」がありませんでした。それで仕事に不都合が起きますと、我を忘れてその処理にあたつた気がします。さらに心配性で気になることがありますと、それを実際ににして触らないと安心できない人でした。そういう父を『気が小さい』と半ば批判もしていましたが、やがて子供も父に似てしましました。三つの魂百までの格言は、私にあてはまります。そうして父の長所を受けて仕事をし、時には職場で認められました。感謝しています。

このたび、私の『親と子』の関係を評価していただき、お礼申し上げます。私の経験が少しでも参考になれば幸いです」

寒いから、雪が降るかもしねないわ。明日でもいいんでしょう。お願ひだから行かないで……」

涙声で訴えたが、父はゲートルを

卷く手を止めなかつた。

月が出ていないので外は真っ暗で

風も強い。どうやつて目的地まで行くのか。私が小学三年のときのことであるから、昭和二十九年の出来事である。当時懐中電燈はなくて、カーバイトの灯りだつた気がする。風の強いときに使えたのか。なに分五十六年も前のことではつきり覚えていない。

ただ心配した姉が、

「父さん、行かないで……」

と泣いて止めると妹までがつられて泣いたのを覚えている。じつは私も風がビュービューと吹き荒れるたびに、父は出かけたら戻つてこられないのではと不安にかられていた。

その夜は、風が強かつた。父の身を案じた当時中学生だった姉が、「父さん、行かないで。風が強くて

しかし、私は止めなかつた。子供ながらにも止めてはいけない気がした。それは仕事に口出しを許さないとの気迫を感じたからだ。父にはそういう筋を曲げない一面があつた。

姉や妹の必死の願いをきかず、父は巻き終えると立ち上がつた。

「父さん、行かないで」

の声を背に受けながらも玄関の戸を開け、次にバタンと閉めた。その音は、父の固い意思を表している気がした。

姉が崩れるように母に抱きついた。

「父さんは、現場を自分の目で見ないと安心できないのよ。性分だからしようがないの」

と母が父をかばつた。そうして、現場を見たら必ず戻ると、子供たちを安心させようとしたが、

「風は強いし、真っ暗なのにどうやつて歩くの？」

と姉も私も同じ心配をした。多分灯りを持たなかつたに違いない。

「大丈夫。毎日仕事で歩いている道だから、目をつぶつても歩けるの。さあ、心配しないで寝なさい」

と諭すように言った。

布団に入つても中々眠られなかつた。茶の間の襖と襖の間から電燈の灯りがもれていた。母が父の帰りを待つてゐるのだ。あれほど「心配ない。大丈夫だ」と言つた母であるが、母だつて不安なのだ。寝ないで父の帰りを待つのであろうか。

再び不安がこみ上げてきた。父は手袋をはめただろうか。さらに、あの白いうさぎのふさふさした毛がついた帽子をかぶつて行つたろうか。

それを確かめなかつたが悔やまれてならなかつた。

またレールが規定より下がつてゐる？」「少しあは寝たわよ」

れば、父一人で直せるのか。一度だけ父がかわつて答えた。

け父たちの線路の保守作業を見たことがあった。五、六人の作業員が大人の背より高い鉄の棒をレールの内側にくつつけて線路の砂利に刺し込み、父の号令で鉄の棒を「よいしょ、よいしょ」と斜めに持ち上げた。下がつたレールを上げたのだと思う。

もしも大がかりな保守作業が必要なら、どうするのか。悪い方へ悪い方へと考えが傾くのを止められなかつた。が、いつしか眠つてしまつた。翌朝、父の話し声で目を覚ました。私は飛び起きた。

「父さん、どうだつたの？」
「レールが少し下がつていたが、列車の運行には支障がない。これから皆で行つて直す」

食事を終えると父は、「一仕事してくる」と線路工夫の詰所（事務所）へ向かった。赤銅色の輝く顔、筋肉が盛り上がった広い肩が、父をよりたくましく見せていた。

長じて姉は幼稚園教諭、私は小学

校教諭になつた。姉が年長組を担当していたとき、保護者から子供がないと知らされた。姉は搜そうと出かける準備を始めると、「子供はテレビの下で寝ていた」との連絡を受けた。そうして、「元気です。びっくりさせてすみません。なんの心配もいりません」と保護者が詫びた。

それなのに姉は、自転車でその子の家へ行こうとした。父にそつくりだと思った。あれほど父を批判したのにと、少々可笑しかつた。

「父さん教えもしないのにね。いざとなれば、やることが同じ」

母が考え込むように言つた。私も

「そろそろ似た者親子」と同調した。すると、姉が少し笑いぎみに言つた。

「Tちゃんだけ同じになるわよ。男同士だから同じどころか、うり二つかな」と。

姉の予言通り、私は父にうり二つになつたかもしれない。直に見ないと気がすまないといおうか安心できないのは同じだった。が、やがて私は起きた問題の処理に追われるだけでは満足できなくなつた。

それは問題の起きそうな場を前もって見つけ、その解決策を練るのである。つまり解決方法を「ああする、こうする」と考えてメモする。（ときには同僚から神経たかり〈神経質〉と煙たがられたが）

と微笑みながら言つた。

父を越えたかどうかは知らないし、それに興味もない。ただ言えることは、今私があるのは親がその肩に乗せて飛び立たせてくれた結果である。

現在六十路半ばの私は、親にも色々な背中があることを知つた。両親は、よい背中を見せてくれたと感謝でいっぱいである。

（終）

であるが、

君の計画案は『スキトオル』ようだ」と評価された。現実的で無駄がなく緻密だから実行しやすいと解釈していたが。

後年姉が、

Tちゃんは問題に追いかけられるのではなく、前もつて準備していたものね。父さんの苦労する姿から思いついたんでしょう。父さんを越えたわよ

親おもふ心にまさる親心



伊 東 静 雄

私は母を敬し、父を愛した。

とつ言う氣にもなれなかつた。

私は親への反抗期はなかつたと思う。そんな贅沢？ のできる家庭環境ではなかつた。とりたてて親孝行な少年でもなかつたが、さりとて親

父は小さな魚屋を営み、益も正月もなく仕事に精をだして一家を支え、七人（四男三女・私は三男）の子を養つた。

の言葉。

「子どもひとりを育てるにはね、母ちゃんはオシツコ一升のむんだよ」この光景は今もありありと目にうかぶ。

の記憶はない。朝早い父より早く起そその性すこぶる素直だつたといえなくもない。反抗期のあつた人が羨ましい位である。

両親が必死で働く姿に接している

と親に逆らうなどは論外で、文句ひ

母から受けた恩恵は次の二つの工

ピソードが最も鮮烈である。あれから既に七十余年を経て、なお母を偲ぶよすがとなつてゐる。

小学二年の冬だつたと記憶する。

母が末弟のオムツを換えようとして両足をあげたとたん、弟の股間からピュッとオシツコがとんで母の顔にかかつた。

「あらま、元気」と母は微苦笑して

顔を拭うと傍らにいた私に言つたこ

の言葉。

「母は——私は母が安らいでいる姿

の記憶はない。朝早い父より早く起

床し、終日家事育児に明け暮れた。

今考えるとあの頃（昭和十年代）、電

気洗濯機だけでもあつたら母はもつ

と長生きしてくれたと思う。

しかし、この時私はある種の感動で幼い胸が詰まるおもいがしたもの

である。

私は『反抗期』という成長過程が全く無かつたという所以であり、又この場面がそれを抑え許さなかつたのかも知れない。

私は生来蒲柳の質で、叔父が「この子は二十歳まで（命が）もつまい」



筆者紹介

伊東静雄（いとうしづお）八十二歳。
無職。

現住所 静岡県沼津市。

受賞の言葉（昨年）十二月十五日午前十時、「あなたのエッセイが受賞の対象になりましたよ」と報せがありました。うれしかったですねえ。

傍らにいた妻がエッセイ内容を聞いて『早速お義父（とう）さん、お義母（かあ）さんに報告しますわ』と仏壇に掌を合わせました。

年の瀬にこの朗報は一年のしめくくり

に最高のプレゼントとなりました。親しい友人らに自慢げに電話し、うれしさの

押売りをいたしました。

ありがとうございました』

と不用意にもらした一言に母は非常な衝撃をうけた。

昭和二十年、戦災で街は灰燼に帰しわが家も被災、焼けトタン小屋での困窮生活、そこへ超食糧難時代が

襲う。カリカリに瘦せ細り微熱と咳がとまらず、ついに血痰をみる始末。

ツベルクリン反応検査は強陽性と出、胸部X線像による所見は肺浸潤。ま、早くいえば結核ということであろう。

金持ちのお坊ちやまなら白樺林に囲まれたサナトリウムで優雅な療養生活でもできただろうが、しがない魚屋の小倅ではそうもいかぬ。

母はどう対処してくれたか。

どこからか鶏卵（当時は貴重食品）

を工面してきたり、鯉の生血が肺病に効くと知つて川魚漁師からとりよせ、その上ナ、ナント蝮（まむし）の焼酎漬まで作つてのませた。

蝮は祖父が近くの山から捕獲してきたもので、一升ビンに入れ、酒屋で焼酎を注ぎこんでもらうと苦しみもがいてビンの口元までのたうちあがつてくる。その気味悪さ、のちに何回も夢みてうなされた。

味？ うまいわけがない。鯉の生臭さ蝮の形容し難い青臭さに辟易し

た覚えがある。これ等は俗説迷信の類だつたろうが、以後なぜか徐々に健康体になつていく。

今、八十路をこえてなお元気を保つていられるのは鯉と蝮と祈りの如き母の執念が奏効したのかも。感謝の念は消えない。――

戦前戦中、わがまちの魚河岸では〈佐治衛門の仲直り〉という戯れ言

が面白おかしく流布していた。

意味するところは『状態を元より悪化させること』。もめごとの仲裁に入つたはいいがよけいこじらせて

しまい、この語の生みの親？ となつた佐治衛門、これぞわが父である。勇み肌の粗忽者、そそそこの好男

子だつたからモテたようで、母を大分泣かせたらしい。浪花節を趣味とし、一緒に入浴すると一席うなるのを常とした。私も『石松代参』の名場面をソラで語れるようになった。

とんだ『門前の小僧』で広い父の背中を流しながら父子の情を深めた懐かしいシーンである。

父は四人の男の子の中ではなぜか私を後継ぎにしようとしていたが、何せ病身だし、才覚その他の点でも適性を疑問視していた。

中学（旧制）を出た頃、私はかなり丈夫になつて並みの青年男子にひけをとらない体格になると、ある日父に請われた。

「おめえに魚屋を継いでもらいて

え」

私は黙つて俯いていたが、実は進学したい旨を伝えると父は額に青筋をたてた。

「学問なんかして一体何になるんだ！」

そして、先立つモノはどうするんだ、ウチにやあそんなゼニはねえ、

「おめえ魚屋を蔑んでいるのか」と怒氣はエスカレート。私は話しても無駄だと観念して抗弁する気も失せていた。

苦学は覺悟の上だつた。昼間働い

て学費を稼ぎ、大学は夜間部へ進学するつもりでいたところ、ある晩父がそつと呼びよせて囁くように言つたことばは今も耳朶に残つている。

「ゼニの心配は無用だ。ナニおめえひとりぐれえの学費はどうにでもならア。……」

しまままで聞かないうちに涙がで

た。父は私の目頭が潤んだのを見ると「バカ、親なら当りめえだ」と肩をポンポンと叩いた。

しかしそんな金をどう工面していったのか。七人の子がいるだけで相当な出費なのに。

父の商売上手は母やお客様からきいたことがある。特に薄利多売をモットーとしていたとの評判は高い。それなりにコツコツと貯めて非常時に役立てる算段だつたのだろう。そして真っ先に私がその恩恵に浴することになった。

後年、私は教職に就いた。

無類の子ども好きだったから正に天職で毎日が充実していた。

当時、父はお客様にこう嘆いて？ みせたそうである。

「しがねえ魚屋の小倅がセンセイだよ。笑わせやがらア。ツブシのきかねえ仕事を選んだもんだ……」

これは父流のテレと自慢だと思う。

父は教師を「先生サマ」と敬称に尊

称までかぶせて敬意をあらわすよう

な昔人間だったから、本音では、ま

るでトビがタカを生んだような誇ら

しい気分になっていたのだ。そういう

意味では唯一の、そして些細な親

孝行となつた。

五十をすぎた頃、こんな想像（妄

想？）を巡らせその実現を夢みるよ

うになつた。

（もしオレが学校長になつたら両親

を校長室へ招待し、校内を案内した

あと先生方一同に「父佐治衛門、母

ていたのだが、叶うことなく二人と

りょうです」と紹介したい」といつた職権濫用プラン。

も私がヒラのうちに鬼籍に入つてしまつた。

「親孝行したいときには親はなし」

この悔いは大方の人が経験するところだろう。当時私には息子がいたが、自分が人の子の親になつて初めて親の恩を強く感じたものだ。

その時父はどんな格好でくるだろ

う。鉢巻なら年季が入つて似合うけど、スーツにネクタイ姿はきっとしまらないよね。傍らで母が「父ちゃん落着いて……」なーんてオロオロする姿をみせるだろうか。

しかし民主主義という不可侵の正義を標榜する職員などからは「公私混同だ！」なんてコワイ弾劾がぶり

かかつてくるかも。それを承知で両親を喜ばせたいとひそかな夢を描いていたのだが、叶うことなく二人と

現在県立ガンセンターへ通院している。前立腺ガン。自宅からセンターまで車でおよそ四十分、自分で運転する。到着するとさまざまな手続きや諸検査をさつさと済ませる。

待合室で同病同年のHさんと懇意

新刊4月26日発刊

親 ひ と す じ

大竹忠治郎の「手記」解説

矢持善和著

（天理大学教授）

A5判並製 頁数・定価未定

図書出版 養徳社

天理市川原城町 388

☎(0743)62-4503

<http://yotokusha.com/>

信頼の跡 伝道者たち



天理教長野教務支庁編
四六判並製 / 224頁
定価 = 1,260 円(税込)

図書出版 養徳社
天理市川原城町 388
☎(0743)62-4503
<http://yotokusha.com/>

になつた。彼は遠方からバスと列車を乗り継いで来院するのだが、やがて歩行困難で「女房は死んだし体は仕事にかまけて面倒みてくれんし、もういつ逝つてもいいや」と自暴自棄気味である。

ある日、Hさんがこんなことを言ふ。院内で車椅子の老齢患者をやさしく介助する親子や夫婦の姿を見るのは辛い、と。

そして「オレなんか……」と首うなだれるのである。励ます言葉も虚ろになつてしまふ。

先日、息子夫婦と孫娘が訪れたの

で、息子に嫌味まじりにHさんの話をきかせた。言外に（たまにはガン

センターへの送り迎えぐらいしろよ）というニュアンスをおわせて。

「オレだって案じている。同僚や友人が親の面倒で大変な苦労をしている話を聞くと、オレの両親は人一倍元気で何でも自分でできるし、ありがたいことだと感謝している。

でもね、イザという時は楯になるさ。なんたつて世界に二人といかないオヤジとオフクロだもの……」とたるものしいオコトバ。

やれやれと安堵したとたんニヤッ

私は息子らに過保護にされたら忽ち自立心を失つて車椅子生活に陥るかも……子どもへの依存心を断ちきる努力を決意した。

と白い歯をみせてこんなこと言うではないか。

「親不孝は親を鍛えるってこともある」

アレレ、返り討ちにあつちゃつた。その晩、寝床で天井を見ながら改めて息子の言を反芻する。（ウム、含蓄に富んだ言葉でもあるかな）と思つた。

(終)

花咲爺の秋



山勢登

なのだと父は説明しながら歩く。やがて出口に至り、屋外へと出たその先こそが横手菊まつり本会場であつた。

午前の雨雲が拭われて秋晴れの空が広がつた午後、父が急に横手ふるさと村へ行くと言いました。自分は氣が進まなかつたが、断りきれずに従つた。半ば強制のように車を運転し、老父を後部座席に乗せて横手行の供をするのは、決して愉快な役目ではない。

三十分を費やし到着した広い駐車場の一面に車を置いて、うろ覚えの父を頼りに横手菊まつり会場を探しました。物産館の入口に看板は出ていたが、大勢の人で賑わう館内を見渡し

ても、それらしき場所は見当たらぬ。県内各地の特産品が所狭しと並べられ、売り子の声が行き交う売場は延々と続いた。横手菊まつりと言えば以前なら横手公園で開催され、会場は一目瞭然であった。今は菊を搬入したはずの父でさえ、搬入時と異なり表玄関から訪れたのでは、会場を探しあぐねたのである。

人に訊いて二階、三階と進み、ようやくそれらしき菊の鉢が並ぶ通路に行き当たつた。これは選考委員の先生方が作った菊ゆえ、賞の対象外

に預けていた一眼レフカメラを受け取り、菊作りに劣らず写真も趣味としている父は早速撮影を開始した。

自分の役目は運転手ばかりでない。この日は撮影助手のようなこともやらされた。たびたびカメラを預かり、菊と並び立つ父の記念撮影に、二度ばかりシャッターを押した。大半は

父がひとりで撮影して回り、自分は

様子である。

手持ち無沙汰を持て余した。風流人

の父に似ず、自分は花の美というも

のを解さない。かような場所にはも

のの十分も居れば飽きてしまう。せ

めて菊人形でも眺めて無聊を慰めて

いたが、父はまだ撮影を続ける

説明した。出品者の名札には、父の

名が達筆で書かれていた。

父の作る菊に、見た目の違う二種

があるとは以前から気づいていた。

花がこんもりと盛り上がるよう咲くのが厚物の部、細長い花が放射状

に広がるように咲くのが管物の部で



筆者紹介

山勢登（やませの
ぱる）四十八歳。

フリーライター。
現住所 秋田県湯沢

市。

受賞の言葉「落選だろうと諦めていた作品が、思いがけず努力賞をいただき、驚いております。

不器用な息子と、不器用な父親。二人

の間に横たわるぎこちない空気を、文章

で伝えるのはなかなか難しいものです。書くことを通して、「親と子」の問題を考えるいい機会にもなりました。この不完全な出来の作品は、そんな試行錯誤の結果でもあります。

その未熟な作品が雑誌に掲載されると知り、少々恥ずかしい思いもいたします。今後も試行錯誤を重ね、よりよい文章を目指したいと思っています」

人がいなかつたのは幸いである。自分はひやひやしながらも、父と少し距離を置いてそれを見守つた。

「見れ。これが今年の管物の部で、財務大臣賞を受賞した菊だ。いい出来だべ」

さつさと終わってくれないものか

と思いながら突つ立つてゐる息子を見て見事である。

「厚物の一位は農林水産大臣賞だ。

見れ、他の菊と比べて、まんざ出来た。金賞を示す輝かしい札は、あち

こちの菊にかかっている。その金賞自画自賛にとどまらず、父は別の人

の作つた厚物菊をも指し、金色の札に隠れていた賞札を表に出して目

立たせる。自作の菊を自慢するよう
に、一際大きいその花の出来を父は
得意げに語り、厚物の選考基準は花
の大きさに尽きるとまで言い切った。

以前であれば聞き流したであろう
父の言葉が、自分の頭に抵抗なく入
ってきた。父の説明を聞いてしばら
くは、自分も菊人形から菊花展の花
へと興味の対象を転じた。

自分は長く菊に親しまないでいた、

と言うより、菊を作る父その人に親
しまなかつた。未だ農業を営んでい
た頃の父は嫌いでなかつた。父が離
農を決意したのは、長男の自分が小
学校に上がるか上がらないかの頃で
あつた。田を売った金を元手に投資
し、その配当金で家族を養おうと考
えたのである。計画は頓挫し、一家
はひどい貧乏暮らしを強いられた。
父の不機嫌が母子の平和を脅かし始
めた。

多年に亘った失業期間を経て工場
で働き始めた父は、この間も菊作り
だけは決してやめようとしなかつた。
生活が楽にならないのは、父が菊に
ばかり金を使うせいだと少年は憤つ
た。菊で収入を得られないものかと、
母を相手に訴えたこともある。父の
菊は売り物でないと寂しい答えが
返ってくるばかりであつた。自分は
菊を憎んだ。

そんな息子に父もまた親します、
親子の仲は冷えきつた。自分が父に
何か用事がある場合は、たいてい母
の口を通してものを言つてくる。そ
れが何年も続いた。表面上は和解し
たように見えて、父と子は今なおぎ
くしゃくした関係を解消できずにい
なつた。春、例年通り菊作りを始め
た父の背中は、どこか寂しげであつ
た。これまで父が所属していた湯沢
市菊の会が、会員の高齢化に伴い解
散と決まつたのである。毎年秋に市
の中央公園会場で開催していた菊発
表の場を、父は失つた。なお菊作り
を続けようという人は、父の他に今
一人がいるばかりであつた。

夏には父が少し体調を崩した。滅
多に病気などしたことのない頑健な
体の持ち主が、珍しく帯状疱疹を発
症し通院を余儀なくされたのである。
その初診時には、隣接する調剤薬局
での会計の際、父は約九千円もの釣
銭を忘れて帰るほど動搖していた。
以後しばらくの間の父は日頃の矍鑠
たる姿に似ず、年相応の老人然とし
て弱々しかつた。父が一気に老け込
んだように感じて自分は心細くなつ
た。

そんな困難にもめげず、秋には再び菊の花を咲かせた父である。長年の経験が凝縮されたその花は、管物の部で全県一位の賞を受賞するほど出来栄えだった。それは父の菊作り人生でも、最上位に値する榮誉であつた。こうして県内愛好家の出品した菊の数々を一望の下に眺めていると、父の得意が理解できる気がする。父がこれほどの菊作りであつたと知り、自分も誇らしい気がした。

「ほれ、この菊はもう腐れてきている。花の出来は悪くねえのに、惜しいことだ」

説明して回りながら、ある無冠の花を父は指した。どれもみな同じようしか見えなかつた菊の花にも、よく見るとひとつひとつ個性がある。たとえ出来が悪くとも、その花には作つた人の思いが詰まつてゐる。早く咲かせすぎた花には作り手の無念が、拙い出来の花には試行錯誤する泥だらけの背中が見えた。これまで幾千幾万となく菊の花を見て來た父ならではの言葉だと思つた。

「これも腐れてしまつた。も今はいいが、もう三日四日もすれば腐れてくるのだ」

選考の日に花のピークが来るよう咲かせるのが難しいのだという。いかにタイミングよく咲かせるかを競うのが、菊作りの醍醐味なのだと父は熱弁をふるつた。常になく饒舌な父の言葉に耳を傾けながら、自分は微笑を禁じ得なかつた。そして不意に、自分の好む文芸という事が父の菊と重なつた。

自分がその前年、県民芸術祭の文芸「詩」部門で最優秀賞を受けた時、昔から小説好きだった母は無論喜んでくれたが、父もまた得意げにその賞状など額に入れ、茶の間に飾つて

4月18日
教 祖 誕 生 祭
祖 誕 生 祭
刊 発

人間がたすかる原理 —「天の理」を解きほぐす—

『自分が変われば全てが変わる』から書名変更

中臺 勘治 著
(報徳分教会長)

四六判並製 304 頁
定価=1,365 円(税込)

図書出版 養徳社

天理市川原城町 388
☎(0743)62-4503
<http://yotokusha.com/>

いたのを思い出す。息子に刺激を受けた父が得意の菊作りで奮起し、それが財務大臣賞の栄冠につながったとすれば痛快である。

この日父が息子を菊まつり会場に連れてきた真意は、言葉ではうまく言い表せないが、何となく理解できるような気がした。真情と言い換えるのが正しいのかもしれない。不器用な父親が不器用な息子に歩み寄ろうとする気配を感じながら、永年の蟠りを解いたわけでもない自分は、

父がせつせと撮影する傍らで、照れ

隠しにまた菊人形眺め始めた。父は菊人形になぞレンズを向けようとしない。親子の心はまだどこかすれ違っている。

途中、自分は父にまたカメラを預けられた。案の定父は撮影の邪魔になる手前側の鉢を持ち、横に傾けて竹柵を潜らせ外に出した。そこへ腕

章をつけた係員の老人が歩み寄った。

「あなた方は新聞社の方ですか?」

「いやいや、湯沢菊の会の者だ」

父は自身出品している関係者であ

ると弁明したが、勝手に鉢を動かしてもらつては困ると係員は苦言を呈した。父は苦笑し二度と鉢を動かしたりしないと謝った。自分はこの係員の態度に不愉快を禁じ得なかつた。

「余所の菊さ手を掛けたのはまずかつたな」

係員が去つた後、父は笑いながら

頭を搔いた。自分も笑つた。この一

幕を笑い飛ばすことで、父との間には奇妙な連帯感のようなものが生じつもあるのを感じていた。

明るんだ。夕陽が照らし出す路傍を眺めていて、父が声を上げた。

「これまた見事な柿だごど。今年は豊作だな」

たわわに実った熟柿の鮮やかな橙が、運転する自分の目にも飛び込んできた。その先々でも父は、「豊作だ、豊作だ」と、車窓に柿の木を見出す度に嘆声を上げた。自分は微笑しながら家の灯を思った。

